

2003 年度生態史プロジェクト報告書

「モノと情報」班C

黎明館川野資料の成立背景とその内容－漁具を中心に－

橋村 修（国立歴史民俗博物館外来研究員）

キーワード：川野和昭、民具、ラオス、竹の焼畑、漁具、

The feature of KAWANO Kazuaki' s collection and the view point of Classification of Fishing Techniques

Osamu HASHIMURA (National Museum of Japanese History,)

Keywords: KAWANO Kazuaki, Material Culture, Laos,
Slash-and-Burn System with Bamboo, Fishing Techniques

1. はじめに

戦後のラオスの生業を軸とした民族調査、民具収集は、岩田慶治らによる稲作民族文化調査団調査が大きな成果として知られている。しかしながら、国内情勢の変化で 80 年代から 90 年代前半にかけて、村に入っの収集調査が思うようにできない空白の時期が続いた。そうした中で 1990 年代後半から鹿児島県歴史資料センター黎明館の川野和昭氏（以下敬称略）は精力的にラオス北部の山村を中心に焼畑や竹、生業、儀礼の各種調査を行い、約 600 ～ 700 点にものぼる民具類を収集した。川野の蒐集したモノ資料は、稲作文化調査団に続く大きなコレクションとして評価されている。

本稿では、川野が 90 年代後半以降にラオス関連のモノ資料（以下では川野資料と記す）を何故蒐集するようになったのか、その研究遍歴と研究視座を概観しながら検討を進める。あわせて、川野資料の内容に関して、執筆者が関心を持つ漁具と漁法を取り上げ、漁具から歴史性を読み解く方法、また執筆者の今後の調査方針などについて展望していく。

2. 川野のラオス資料収集調査までの研究の遍歴と視座

まず、川野和昭がラオス調査に到るまでの研究履歴について概観する。川野は 1949 年鹿児島県曾於郡志布志町四浦の生まれで鹿児島宮崎両県境の山中の自然の中で育った。高校では機械科に学び、大手電機メーカーに就職した。川野のモノの構造、製作工程を詳細に把握する眼はこの時期に培われたといえる。在職中に國學院大學第Ⅱ文学部（夜間部）に入学し国文学、民俗学を専攻した（指導は白田甚五郎教授）。1973 年、鹿児島県高等学校教員として採用され奄美大島へ赴任した。そこで、山下欣一らと出会い南西諸島の民俗研究を、また、小野重朗、村田熙を中心とした鹿児島民俗学会に参加し、とりわけ小野からの影響を大きく受け [川野 2002]、生業や農耕儀礼に関する研究を進め、その民俗分布とその差異をとらえる方法を会得していった。川野は小野を生涯の師と仰ぎ、小野の諸説を発展的に乗り越える研究を進めているといえる。

1980 年には、鹿児島県歴史資料センター黎明館開館準備室に配属され、民俗展示を担当した。1985 年から教育現場に戻るが、その間、坪井洋文によるイモ正月の抽出、稲作単一文化論の再考の議論に多くの影響を受けながら、南九州から九州山地（五木など）、トカラ列島での焼畑調査研究を進めている。川野が近年、赤坂憲雄らと共に提唱している雑穀文化や山の文化を基軸にした日本文化の多元性（「ひとつでない日本」）の議論は、坪井からの影響を大きく受けているといえよう。執筆者は、高校時代の 1989 年頃に川野の授業（古文）を受講していた。高校生だった我々に、日ごろから五木村採訪のデータを坪井の諸説と重ねて講義していた川野が、坪井急逝の知らせを涙ながらに語っていたことを鮮明に覚えている。1990 年代後半に「日本でない南九州や南西諸島」の文化の淵源を求めてラオスをはじめとした東南アジアへ旅立った川野の研究姿勢は、坪井洋文の存在を抜きにして語ることはできないといえる。

1994 年には再び黎明館へ復帰し、特別展『鹿児島・竹の世界－環シナ海の視座から－』を担当、竹の重要性

についてアジアを視野に入れた調査研究を本格的に進め始めた [川野 1995]。それを契機にして、1996 年 3 月に自費でラオス調査を開始し、その後も 1996 年 12 月～1997 年 1 月、1997 年 10 月～11 月、1998 年 5 月～6 月、1999 年 4 月～5 月と 5 回に亘って調査を重ねている（2003 年 12 月～2004 年 1 月は地球研からの派遣）。このように川野は、ラオスで得た竹の焼畑の知見や各種蒐集資料を南九州・南西諸島と比較分析しアジア世界の共通性を見出している。また、自身の研究姿勢も南九州から南西諸島の民俗学から比較民俗学、農学などの隣接分野などとの交流へと広く展開している。なお、一連のラオス調査の成果の一部は、平成 10 年の『海上の道』展として公開されている [川野 1999]。

川野のラオス調査の方法は、一村を定点的に長期間にわたって調査する文化人類学者の手法とは異なり、南九州から南西諸島の民俗文化を精査した眼差しで一村を 2 日から 3 日程度の短期間で調査しながら広域的に歩き、できるだけ民俗分布を把握することにつとめることを特徴としている。そして、ラオス調査で得た生業、民具、儀礼などの内容を、常に南九州、南西諸島へフィードバックしながら検討している。また、竹の焼畑に関する一連の調査成果は、民俗学や文化人類学の枠を超えて熱帯農学や林学の分野からも注目されている。

3. 漁具への眼差し—ラオス漁具と近世近代日本の漁具との比較と展望—

1) 漁具から歴史をよむ方法

ここでは川野資料から読み取れる諸問題のうち、特に漁具について、その見方も含めて検討していく。川野は南西諸島とラオスの共通性をモノの類似性からとらえ、稲の道や海上の道などの文化伝播の可能性を見通している。その見通しは南西諸島と東南アジアの交流史の一齣ともいえる。しかし、その方法は地域差をとらえることに主眼をおいているため静態的な把握にとどまり、モノから歴史的な展開をどう読み取るのかについては川野自身も課題であることを述べている。では、モノからどのようにして歴史を見出せるのだろうか。これまでも考古学の遺物データと民具との比較研究が進んでいたが、近年では中世や近世などの文献史料や絵画資料を用いた研究が進みつつある。この動きには、澁澤敬三のもと宮本常一らがまとめた『日本常民生活絵引』の刊行や 80 年代の網野善彦を中心とした社会史の隆盛が背景にあった。

漁具や漁業技術の歴史的な展開については、真鍋篤行 [真鍋 1997] に代表されるように考古資料と中世近世の文字史料、絵画史料を組み合わせた方法が示されている。つまり、絵画史料は、明治期の『日本水産捕採誌』や各県の明治期水産図誌（明治 16 年水産博覧会で作成）と近世浦方史料、近世漁場争論絵図を比較すると、近世期⇒明治期⇒現代の漁具の変化を読み取ることができるのである [藤塚 1998]。

戦前の台湾、中国、東南アジアでこうした手法でモノの歴史をみるためには、南洋協会やフランス、イギリス統治時代の各種資料を用いることになるが、基本的に無文字社会で記録を残す習慣のない地域が多いため、地元の人々自身による記録資料は皆無に等しい。しかし、ラオスなどでは伝統的な漁撈を残している内水面漁業が展開していることから、現状把握や聞き書きを徹底して進めると、過去 60 年程度のモノの歴史を復元することも可能である。その際、聞き取り内容と日本の近世近代の伝統漁具や漁法、漁場利用慣行を描いた図説や史料を参照することで日本とラオスの共通性や違いについて具体的な姿をとらえる可能性もある。

2) 調査の視点と川野資料

ここでは漁具を調査する視点について、川野資料や川野の調査記録と関わらせながら述べていきたい。

(1) モノをみる—漁具材質の変化—

漁具をみる視点を列挙していく [日本学士院日本科学史刊行会編 1959] [渋沢 1962]。釣糸の場合は、糸→絹麻→テグス輸入と応用からナイロン製糸への変化をおさえていく。また、漁具の材質に関して木製（竹）から近年ではプラスチックへと変化している点について、どの漁具がプラスチックに変化しやすく、また漁具は竹製のままだ注目する必要がある。これは網の材質の変化（つる網（中世）苧麻網・藁網⇒化学繊維）も然りである。これまで多かった延竿（一本竹竿）から持ち運びに便利な継竿に変化していく傾向もある。つまり大型漁具を分解して持ち運びやすくし、村外に出て移動漁業（遠出の漁が進展）をすることも容易になる。これは、竿だけでなくいろいろな道具にも応用できる。また、川舟調査ではその形態から地域差（急流に強い舟、ヒラタ舟など）

をとらえることが可能である。日本近世の川舟の構造の地域差に関する豊富な研究蓄積から、メコンの本流、支流などの川舟の構造に関する地域差を考えることができるのではないかと。舟大工への取材と、その造船工程についてビデオなどで記録していきたい。こうした漁具や関連するモノ資料の変化は、単線的な展開でなく地域差異、あるいは漁業規模による差異などに注目しながら検討する必要がある。

(2) モノの所有—「個人」の漁具、「共同体」の漁具—と地域社会

モノ研究の展開の可能性について述べていきたい。モノの所有についてかつて小野重朗は、筌やひびを規模の小さな漁具として個人所有の民具、石干見、大敷網などといった規模の大きな漁具を共同体（村、網組、釣組）所有の民具として区別して、モノから社会構造をとらえる視点を提示している [小野 1969]。これは近年のコモンズの議論にも通じる。

筆者はこうした視点で柴漬け漁業に注目して調査したいと考えている。川野は、タイラオ族の柴漬漁業（ラック）を記録している。川野によると、ラムカーン川の淀みから急流に変わるいわゆる瀬の部分に2～3つのラックと呼ばれる柴漬けが設置されていた。これは12月から2月の乾季に柴を積んだものを設置し、魚を捕るときは網を建てめぐらして外に魚を出していたという。漁は1週間から2週間おきに行われていた。その利用や所有関係、柴漬けの装置、構造や所有利用関係の地域的な違いなど、今後調べる課題は多岐にわたっている。これまで柴漬け漁業は河川のみならずむしろ海において回遊魚の集魚装置（FAD）として東南アジアから東アジア（対馬暖流域）に広く分布する漁法として注目されてきた。柴漬け漁業の発生が、河川からなのか、あるいは海からなのか、ラオスのメコン川本流支流の調査を通じて、何らかの見通しを得られるかもしれない。なお海における集魚装置は、シイラ漬木などの原初的形態の漁具から沖縄のパヤオのような巨大な「漁業構造物」まで多種多様である。また、竹製だった漬木にビニルパイプを束ねたものが使われる変化の傾向もみられる。メコン流域ではここまでの変化はみられないと思われるが、何かがどう変わったのか記録する必要がある。また、柴漬を入れる時期に何らかの行事が行われる可能性もある。例えば、村共同体による柴漬け設置の場合は、籤引で入れる者や使用者グループを決める場合もある。こうした事例は、雨季から乾季への変化の中での河川漁撈のあり方をとらえていくことにもつながる。東南アジアの漁具と南九州と南西諸島漁具の比較を進める上でも、川野が示した筌、魚籠（「海上の道」展）と共に柴漬け漁は注目すべきテーマといえる。

また、モノと地域社会、すなわち、漁法・漁具の変化が地域社会に与えた影響についても検討する必要がある。たとえば、新規の漁具・漁法が漁村社会へ与える影響など、日本近世ではマグロ大敷網の導入・捕鯨の導入が既往の漁法を駆逐し従来の漁業秩序を変化したことが示されている [中野 1996]。河川漁撈の場合、そうした変化を見出しにくいかもしれないが、モノの変化が村や地域に与える問題を検討してみたい。

(3) モノづくり、モノ売りの人々—漁具作り、漁具売りの人々—

日本国内では、特定の集団によってテグス作りとテグス売り（阿波、淡路の限られた村の職人が行う [勝部 1990]）、釣針売り（西脇釣針職人が瀬戸内海から四国、九州まで [播州釣針協同組合 1989]）が行われてきたことが知られている。また、釣竿職人の系譜についても究明されている。付言すれば、現在ではその制作自体が非常に貴重な作業となったため、実用から趣味の嗜好品へと変化している。このように日本では文書資料（顧客名簿や明細帳）が多く残っているため、職人（移動民、漂泊民、竹細工職人）の仕事内容や系譜の歴史的な復元が可能となり、漁具作りの人々の詳細が究明されている。これらの方法はラオス研究に当然有効となる。川野和昭は、魚籠をラオスの竹細工職人に作らせて、その経過を詳細に記録している。今後は、釣針や舟などを作らせて、ビデオや写真撮影、時間経過のメモをとりながら、モノ作りのプロセスを克明におさえていきたい。そのプロセスを指標にして各地と比較することが可能となる。

4. まとめ

本報告では、黎明館川野資料の前提となる川野和昭の研究遍歴と視座を概観し、あわせて川野資料や調査記録から得られた様々な問題のうち、漁具漁業関係について、その調査研究方法やモノ資料を歴史時代にどう遡及させ位置づけていくか、展望も含めて議論を行った。

付記 本稿は平成 15 年 7 月 14 日の地球研モノと情報班勉強会（漁具の会）で報告した内容を含んでいる。当日参集の方々に有益なご意見をいただいた。記して感謝申し上げます。また川野和昭氏のラオス調査データ（未公開分）については川野氏の許可を得て使用した。

参考文献

- 小野重朗 1969 『南九州の民具』 慶友社。
- 勝部直達 1990 『テグス文化史』 溪水社。
- 川野和昭 1995 『鹿児島・竹の世界一環シナ海の視座から一』 黎明館特別展図録。
- 川野和昭 1998 『海上の道一鹿児島文化の源流をさぐる一』 黎明館企画特別展図録。
- 川野和昭 2002 「小野重朗の民俗学 その挑戦的継承のために」『東北学』 6 : 285 - 295。
- Gordon Claridge, Thanongsi Sorangkoun and Ian Bairdn eds. 1997 COMMUNITY FISHERIES IN LAO PDR: A SURVEY OF TECHNIQUES AND ISSUES.: IUCN-The World Conservation Union.
- 渋谷敬三 1962 『日本釣漁技術史小考』 角川書店。
- 中野卓 1996 『鰯網の村の四〇〇年一能登灘浦の社会学的研究一』 刀水書房。
- 日本学士院日本科学史刊行会編 1959 『明治前日本漁業技術史』 日本学術振興会。
- 播州釣針協同組合 1989 『播州針一播州釣針協同組合 50 周年記念誌一』。
- 藤塚悦司 1998 「明治期成立の水産絵図と『日本水産捕採誌』『民具研究』 117 : 1-25.
- 真鍋篤行 1997 「瀬戸内海地方の漁網業技術史の諸問題」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』 10。